

幸之宮大尽（こうのみやだいじん）と九ヶ村落（くかむらおと）し（西袋・小作田・松之木）

幸之宮（こうのみや）の飯山家（いいやまけ）は、幸之宮大尽（こうのみやだいじん）といわれる。何（なん）でも幸之宮大尽（こうのみやだいじん）の二、三代目（だいめ）のころの話（はなし）だが。

鶴ヶ曾根村（つるがそねむら）や松之木村（まつのきむら）、小作田村（こさくだむら）、上馬場村（かみばんばむら）の四か村（そん）の悪水（あくすい）がはげずなんぎしたそう
な。

「堀（ほり）をほって、西袋村（にしぶくろむら）のところの綾瀬川（あやせがわ）に悪水（あくすい）を落（おと）したらよかんべ。」

「古利根川（ふるとねがわ）の川（かわ）ぞいと、大原村（だいばらむら）もちはんが高（たか）いから、西袋村（にしぶくろむら）で落（おと）すのはよい考（かんが）えだ。」

村名主（むらなぬし）たちは連署（れんしょ）をもって、西袋村名主（にしぶくろむらなぬし）へ申（もう）し込（こ）むことになった。その世話人（せわにん）に、幸之宮大尽（こうのみやだいじん）があたったそうな。

一方（いっぽう）西袋村（にしぶくろむら）では、

「よその村（むら）の悪水（あくすい）をもってこられては、てへんだ。」

「村人（むらびと）ぜんいんで反対（はんたい）することにするべー。」

と決（き）められ、名主（なぬし）平太夫様（へいだゆうさま）から大反対（だいはんたい）をくったそうな。

幸之宮大尽（こうのみやだいじん）は、名主（なぬし）平太夫様（へいだゆうさま）に何度（なんど）もかけあった。それは、草履八足（ぞうりはっそく）どころの願（ねが）いでもゆるされなかったそうな。そこで、幸之宮大尽（こうのみやだいじん）は、お代官様（だいかんさま）に村（むら）の様子（ようす）をみてもらうため、お出（い）でいただいたそうな。お代官様（だいかんさま）は各村（かくむら）をみられたあと、幸之宮大尽（こうのみやだいじん）の家（いえ）でもてなしをうけた。

「いなかゆえ、何（なに）もありませんが。」

とって、膳（ぜん）に小判（こばん）をのせごちそうしたんだそうな。

それからまもなくお代官様（だいかんさま）から堀（ほり）をほることがゆるされた。村人（むらびと）はよろこび、

「反対（はんたい）した名主（なぬし）平太夫様（へいだゆうさま）のお屋敷（やしき）をめぐらしてほるべー。」

ときめてほった。そして平太夫様（へいだゆうさま）のところで急（きゅう）にまげたそうな。

とくに水（みず）になんぎしていた伊草村（いぐさむら）や松之木村（まつのきむら）、小作田村（こさくだむら）などが救（すく）われたそうな。

この伝承は、中島の角谷一郎氏・幸之宮の念仏講中・入谷の高橋五九二氏・中馬場の汁間元次郎氏・西袋の小沢平吉氏等の伝承メモを基に構成した。この説話の九ヶ村落しは、立野堀村から浮塚村に至る十三ヶ村落しのことである。明治九年の『村誌取調書』の立野堀村の項に、「本村上根通ヨリ起リ南ノ方浮塚村ニ至綾瀬川ニ入ル、長三拾五町幅九尺、最寄九ヶ村悪水ヲ瀉下ス」と立野堀から浮塚に至る排水路と記される。長い悪水堀のため、綾瀬川に沿ったところは、数か所に塚を設け、その都度、水を調節し用悪水堀として用いた。

この伝承は、鶴ヶ曾村や小作田村・上馬場村・松之木村の四ヶ村悪水路（新堀）が九ヶ村落し堀組合へ加入したおりの掘割り伝承である。そして四か村が加入後、九ヶ村落しは十三ヶ村落しとも呼ばれるようになった。幸之宮は、八条村のムラ組で、飯山家は幸之宮の組頭を勤めた家である。

西袋村の村名主は小沢（平太夫）豊功で、豊功は触次名主をも勤めた。新塚設置のおり各村は、触次名主の諒解を得るのに苦勞したのであろう。また、触次名主屋敷沿いを開削するため、触次名主に反対されたと推測される。九ヶ村落しの排水堀と新堀の合流を小沢家屋敷の箇所ですするため、排水塚樋新設の苦勞話が伝承されてきたものと思える。

蛇橋(へびばし)

(大曾根)

江戸時代(えどじだい)の中(なか)ごろまでの綾瀬川(あやせがわ)は、後谷村(うしろやむら)から西(にし)へ大(おお)きく蛇行(だこう)し、大曾根村(おおそねむら)へ深(ふか)くくいこんでいた。足立郡側(あだちぐんがわ)は、幕府(ばくふ)の直轄地(ちよっかつち)で、小菅村(こすげむら)には将軍様(しょうぐんさま)の鷹狩(たかがり)のお休(やす)み所(どころ)の小菅御殿(こすげごてん)があり、堤(つつみ)は、嚴重(げんじゅう)につくられていた。反対側(はんたいがわ)の大曾根村(おおそねむら)は、森川下総守様(もりかわしもうさのかみさま)の領地(りょうち)で、よく土手(どて)がきれ、洪水(こうずい)にあったそう。

秋(あき)の収穫(しゅうかく)のまぎわに、村人(むらびと)は、豊年万作(ほうねんまんさく)を祝(いわ)う秋祭(あきまつ)りの準備(じゅんび)と獅子舞(ししまい)の練習(れんしゅう)に余念(よねん)がなかった。反対(はんたい)に大曾根(おおそね)の名主(なぬし)新八(しんぱち)だけは、秋(あき)のとり入(い)れ前(まえ)にうかぬ顔(かお)をして、村(むら)めぐりをしていた。

ついに名主(なぬし)新八(しんぱち)が心配(しんぱい)する長雨(ながあめ)がきて、川幅(かわはば)のせまい綾瀬川(あやせがわ)は大増水(だいぞうすい)し、いまにも氾濫(はんらん)しそうになった。

名主(なぬし)新八(しんぱち)は、大曾根村(おおそねむら)を水(みず)から救(すく)うため、獅子舞(ししまい)の獅子頭(ししがしら)をかぶり、腰(こし)に長(なが)い布(ぬの)をたらし、竜(りゅう)にみせて花又村(はなまたむら)におよいでいった。

上野(うえの)輪王寺領(りんのおうじりょう)の花又村(はなまたむら)の村人(むらびと)は、大曾根村(おおそねむら)が決壊寸前(けっかいすんぜん)なので、今年(ことし)も土手(どて)の心配(しんぱい)がないと安堵(あんど)していた。ところが、一匹(いっぴき)の竜(りゅう)が大曾根村(おおそねむら)からうねりながらわたってくる。一目散(いちもくさん)ににげ、遠(とお)くのほうで見(み)ていると、竜(りゅう)が土手(どて)を切(き)りだした。将軍様(しょうぐんさま)からお預(あず)かりしている土手(どて)が切(き)られたら一大事(いちだいじ)と、とって返(かえ)すと、獅子頭(ししがしら)をかぶっているのは大曾根村(おおそねむら)の村人(むらびと)である。とんでもない野郎(やろう)だ。なぐるやけるやで、片目(かため)をえぐり、濁流(だくりゅう)の中(なか)へたたきこんだ。花又村(はなまたむら)が、大出水(だいしゅっすい)となり、幕府(ばくふ)の役人(やくにん)が調(しら)べてみると、大曾根村(おおそねむら)の名主(なぬし)が堤(つつみ)を切(き)ったとのこと、名主(なぬし)の家(いえ)は、竹(たけ)でかまえられてしまった。この悲惨(ひさん)な出来事(できごと)に老母(ろうぼ)は気(き)が狂(くる)い、毎晩(まいばん)「新八(しんぱち)や蛇(へび)になれ、わしも蛇(へび)になる。親子(おやこ)とも大蛇(だいじゃ)になり、恨(うら)みをはらすのだ。」とさげびながら綾瀬川(あやせがわ)に身(み)を投(とう)じた。その

後(ご)、二匹(にひき)の大蛇(だいじゃ)はふきんをあげまわり、村人(むらびと)さえもよりつかなくなった。

あるとき、江戸(えど)の役人(やくにん)浅田近右衛門(あさだきんえもん)と妹(いもうと)のしづが船(ふね)にのり、大曾根村(おおそねむら)へさしかかると、片目(かため)の蛇(へび)と白(しろ)い蛇(へび)が浅田近右衛門(あさだきんえもん)にたちむかってきた。近右衛門(きんえもん)は刀(かたな)を抜(ぬ)き、切(き)ってすてようとし立(た)ち上(あが)ると、船(ふね)が転覆(てんぷく)し、妹(いもうと)しづがゆくえ知(し)れずとなった。いろいろ調(しら)べると先(さき)のような話(はなし)で、このことを将軍(しょうぐん)吉宗様(よしむねさま)に報告(ほうこく)し、金五両(きんごりょう)を下賜(かし)され、「蛇橋(へびばし)」「蛇塚(へびづか)」をつくり供養(くよう)したという。それから蛇(へび)はでなくなったそう。

綾瀬川に架橋されてきた蛇橋にまつわる伝承は、多数の古老からうかがった。その伝承は様々で、断片的である。また足立区側と八潮側の伝承が異なる箇所がある。

大曾根での採話は、栗原長吉・大山万次郎・豊田友三氏等から昭和四十三年(1968)に採録した語りである。採話の骨子は、綾瀬川が増水し八幡神社の獅子頭を村人が持ち出し、対岸の花又の土手を切りに行ったおり、花又の人たちにとられてしまい、花畑も獅子舞に用いられているとの伝承であった。一方、足立区花畑の伝承は、宮司浜中氏や神社脇の豊田・島田氏等(昭和四十三年採話)によると、花又側が決壊しそうになり対岸の大曾根村の土手を切りに行き、つかまり殺されてしまった者へ、獅子舞いを奉納して供養しているとの伝承であった。

この物語は治水にまつわる幕府に対する庶民のささやかな抵抗を語る哀話で、広く知られる話だ。二匹の蛇とは、川の蛇行を意味し、白い蛇は古綾瀬川、片目の蛇は綾瀬川の上野輪王寺領の花又村の土手をさし、片手落ちの幕政を意味する。幕府の役人浅田近右衛門とは、森川領惣代名主を勤めた伊勢野の浅田氏のこと、近右衛門と新八の努力により綾瀬川が享保十二年(1727)に開削され直動になった伝承が表現されている。大曾根には、「蛇田」「蛇塚」の地名がのこり、蛇塚の上には供養石がたてられていたというが、昭和四十三年(1968)当時、すでになかった。

その昔（むかし）、何（なに）やら徳川中（とくがわなか）ごろというが、スマートな器量（きりょう）よしの「お先（さき）」というキツネが、がけ溜（だめ）にすんでいた。

ある時（とき）、キツネ仲間（なかま）の寄（よ）り合（あ）いがあった席上（せきじょう）で、お行塚（ぎょうづか）にすんでいた「ジューコー」というキツネがお先（さき）を見初（みそ）めたが、告白（こくはく）がどうしてもできず、思（おも）いはつのるばかり。

日夜（にちや）ときを選（えら）ばず「コンコン」と泣（な）いたり、がけ溜（だめ）の縁（ふち）にきてはじゃがみ込（こ）み、魚（さかな）をとるでもなく、ガックリ肩（かた）を落（おと）す空虚（くうきょ）な姿（すがた）。まさしく極度（きょくど）のノイローゼになった。

その哀（あわ）れな姿（すがた）をみかねた近（ちか）くにある若柳（わかやなぎ）稲荷（いなり）のお使（つか）い番頭（ばんとう）で「ゲンノジ」という格式（かくしき）の高（たか）いキツネが中（なか）に入（はい）り、がけのお先（さき）の両親（りょうしん）に何回（なんかい）となく話（はなし）をもっていったが、当（とう）のお先（さき）は知（し）らないこと。

「縁（えん）のない話（はなし）はいたしかたない。」と両親（りょうしん）から断（ことわ）られ、片思（かたおも）いのショックで、ジューコーは穴（あな）にとじこもったままの毎日（まいにち）が続（つづ）いた。

お使（つか）い番頭（ばんとう）のゲンノジに「けっしてお先（さき）を恨（うら）むではないぞな。」とさとされたものの、穴（あな）をはい出（で）る気力（きりよく）もない。

そんな話（はなし）を聞（き）いた村人（むらびと）たちは、「ジューコーがあまりにかわいそう。」とだれ言（い）うとなく野良仕事（のらしごと）の帰（かえ）りは、おやつ、ごはんなどを穴（あな）の入口（いりぐち）に置（お）いてやった。

いく日（にち）かが過（す）ぎ、正気（しょうき）に戻（もど）ったジューコーは、村人（むらびと）の好意（こうい）に深（ふか）く感謝（かんしゃ）し、村人（むらびと）が見下（みお）ろせる小高（こだか）いお行塚（ぎょうづか）の上（うえ）に立（た）ち、尾（お）を上（うえ）に向（む）けると晴（は）れ、左右（さゆう）に振（ふ）れば雨（あめ）、丸（まる）めると風（かぜ）というように毎日（まいにち）の天気（てんき）を知（し）らせ、村人（むらびと）たちの恩（おん）にむくいたという。

一方（いっぽう）、お先（さき）も、亀有（かめあり）の矢沢（やざわ）の森（もり）のキツネを夫（おっと）に迎（むか）え、かわいい子（こ）だからに恵（めぐ）まれ、幸福（こうふく）に過（す）ごしたという。

八潮地方にける豊作祈願の一つに、水口祭祀信仰がある。この水口祭祀場は小高く築かれ、雨乞いや虫除けにはかがり火を灯して祈願した。そのためか、トウカンヤマ（灯火山、稲荷山）、トウカンダイ（灯火台、稲荷台）と呼ばれる。このような祭祀場の木や竹を切ることがタブー視されてきたため、木々が繁茂し狐等の小動物の生息地となった。特に狐は田の神の稲荷神の眷属とみられるようになると、狐を愛称で呼ぶようになった。

狐の稲荷火を「狐の嫁取り提灯」と呼ぶ。圻稲荷神社の主である御先狐は、人間によく憑くといわれ、嫁取り提灯がみえと「圻の御先狐が人をだまくらかした。」とあって、八潮地方では名の知られた狐であった。この御先狐にまつわる伝承は八潮市郷土研究会員であった岩淵正男氏が機関紙『跡標 創刊号』（昭和四十九年刊）に投稿した「横丁の伝説 八潮市がけ溜」から本書は転載した。オウギョウヅカ（御行塚）は潮止小学校にあった行人塚のことで、ジューコーが主であった。源之次狐は若柳稲荷神社の狐である。狐は、稲の神様の使者といわれ、水田地帯の八潮地方では狐にまつわる伝承が特に多い。

古新田（こしんでん）福蔵院（ふくぞういん）のお大師様（だいしさま）は、靈験（れいげん）あらたかな仏様（ほとけさま）でね。

昔（むかし）、この付近（ふきん）が大水（おおみず）にあった時（とき）、お大師様（だいしさま）が古新田（こしんでん）に流（なが）れついた。村人（むらびと）は、弘法大師様（こうぼうだいしさま）が古新田（こしんでん）に流（なが）れつかれたのは、何（なに）かわれがあるのだろうと思（おも）い、大師堂（だいしどう）をたてて安置（あんち）することになった。

お大師様（だいしさま）は、大水（おおみず）で流（なが）されてきたために、みすぼらしく傷（いた）んでいた。そこで流山（ながれやま）の仏師屋（ぶっしや）に修理（しゅうり）してもらうことになった。寺（てら）の世話人（せわにん）たちがでかける日（ひ）、あいにく朝（あさ）から風（かぜ）が吹（ふ）きあれていた。そのために江戸川（えどがわ）の幸房（こうぼう）の渡（わた）し船（ふね）は、朝（あさ）から船（ふね）が出（だ）せずいた。

世話人（せわにん）たちは、この風（かぜ）で渡（わた）し船（ふね）に乗（の）れるか心配（しんぱい）であった。ところが、幸房（こうぼう）の渡（わた）し場（ば）につくと風（かぜ）がピタリとやんだ。渡（わた）し船（ふね）が流山（ながれやま）につくと、もとのように風（かぜ）が吹（ふ）きあれた。世話人（せわにん）たちは、これはお大師様（だいしさま）のおかげかと思（おも）った。ところが、修理（しゅうり）をおえて帰（かえ）るときも同（おな）じようなことがおこったので、世話人（せわにん）たちが靈験（れいげん）あらたかな大師様（だいしさま）であることを信（しん）じたそう。

八潮地方には流仏伝説や水中・土中出現仏の伝説が多い。土中から仏様が出現しその跡が井戸や池になったといわれるのは西新井大師像と吉川村木売清浄院の親鸞上人像、水中・海中から出現したといわれるのは浅草寺観音像と彦倉虚空蔵像、中島持昌院の弁財天像などである。また松之木観音像は八条用水からの出現仏である。

八潮地方には、流れついた諸神仏を拾い祀ることと諸神仏を流す伝承がある。前者は拾い祀ることにより靈験をあらわし家を榮されてくれる信仰で、後者は病いや不運を神仏に託して流す習慣である。古新田福蔵院（真言宗）の弘法大師像は水害のおり古新田に漂着した水中出現伝承をもつ仏像である。

この大師像は、天保五年（1834）の弘法大師一千年遠忌発願の地域霊場の新四国八十八ヶ所の七十三番の札所である。札所の御詠歌には「ありがたや武蔵の里の古新田、浮かぶ大師の光仰ぎ手」と流仏の様子が詠い込まれている。

水の災い伝承の中では「大水があった時、お大師様が古新田に流れついた」だけのことで水災にかかわる内容をふくんでいない。また「靈験あらたか」と伝えるが、特に水の災いに関わる伝承はない。単に水害のおり流れ着いたのみで、漂着の神仏は御利益をもたらず信仰をリアルにするため、大水にたとえた説話となっている。

江戸城（えどじょう）二重橋（にじゅうばし）の木（き）

（西袋）

江戸幕府（えどばくふ）は、江戸城西（えどじょうにし）の丸（まる）の二重橋（にじゅうばし）かけかえのために、橋材（はしざい）の調達（ちょうたつ）を命（めい）じた。

代官平岩右膳（だいかんひらいわうぜん）は、各触元名主（かくふれもとなぬし）へ橋材（はしざい）になりそうな大木（たいぼく）の調査（ちょうさ）をさせた。八条領（はちじょうりょう）触元名主（ふれもとなぬし）平太夫（へいだゆう）は、領内（りょうない）の各村（かくむら）に古木書（こぼくか）きあげの提出（ていしゅつ）をつげた。ところが各村（かくむら）からは、大木（たいぼく）がないとの報告（ほうこく）をうけた。

代官（だいかん）は、八条領内一（はちじょうりょうないいち）の陣屋（じんや）の木（き）を出（だ）すようにおおせつけた。

西袋村（にしぶくろむら）名主（なぬし）平太夫（へいだゆう）は、村人（むらびと）にそのことを相談（そうだん）すると、

「それは、あんまりだ。西袋村（にしぶくろむら）の陣屋（じんや）のうちのけやきは、村（むら）の目印（めじるし）の木（き）だ。その木（き）を切（き）られちゃー、村（むら）の位置（いち）さーわかんなくなってしまうだ。」

「そうだ。どこの村（むら）でも古木（こぼく）は、ご神木（しんぼく）になっているだ。陣屋（じんや）の木（き）を切（き）られちゃー、村（むら）にどんな災（わざわ）いがおこるかしんねー。」

などと反対（はんたい）をされた。

そこで名主（なぬし）は、代官（だいかん）に、

「西袋村（にしぶくろむら）の陣屋（じんや）の大木（たいぼく）は、村（むら）が水（みず）につかったおりのひなんの木（き）であります。そのため、大木（たいぼく）をぜんぶ切（き）るのではなく、一本（いっぽん）だけはのこしてくれませんか。」

とお願い（ねが）いをし、ゆるされた。そのことを報告（ほうこく）すると村人（むらびと）はたいへんよろこんだ。

大木（たいぼく）の切（き）り出（だ）しから荷送（におく）りは、村人（むらびと）そう出（で）の仕事（しごと）となった。切（き）った木（き）を笛（ふえ）や鉦（かね）のなり物（もの）にあわせて江戸城（えどじょう）へ運（はこ）んだ。

そして江戸（えど）見物（けんぶつ）ができた西袋（にしぶくろ）の村人（むらびと）のじまん話（ばなし）の一つになった。

のこされた一本（いっぽん）の大木（たいぼく）は、たしか昭和（しょうわ）40年（ねん）ごろまではえていましたよ。

西袋小沢家（屋号陣屋）の屋敷地は、御家人曾根長五郎の屋敷跡である。曾根（興津）氏は、伊奈家の手代をし、三代将軍家光のころ幕士となった。陣屋地名は、伊奈家手代の曾根氏の住まいから因る。民話は文政十一年（1828）に江戸城西之丸二重橋の架橋のおり、小沢家の屋敷林から登板三枚が調達された説話である。昭和四十年（1965）ごろに切り倒された残された樫の根本の回りが役七メートル近くもあることから、二重橋に調達されたおりの樫も大木であったと思われる。小沢家では、調達された樫材の一部を嘉永五年（1852）に屋敷神の御神体として勧請し祭祀している。